

# ONE LOVE 通信 52号

2014年7月26日

1994年4月、ルワンダ国内でたくさんの命が失われました。植民地政策によりルワンダの国民が3つに分けられ、民族の優劣がつけられ、そのために憎しみが起こり、人々は殺し合いました。

その時から20年。当時ルワンダにいた人たち、そして国外に逃げていたルワンダ人、全てが何らかの形でこの大虐殺に係っています。殺した人、殺された人、そしてその家族。彼らの心の中にあるものは一人一人違う。しかし2014年という年は、彼らみんなが一つの節目として迎えた年なのではないでしょうか？これから20年先のルワンダにも幸あれ。



## 【私たちはルワンダ人です。】

4月、ルワンダは100万人以上の人々が殺されたあの虐殺から20年目を迎えた。いつもと同じように時間が過ぎ、いつもと同じように過ごしているルワンダ人だが、この4月は全てのルワンダ人にとって、特別な時だったように感じる。

人は時間に区切りをつけながら、日々を過ごしている。学生であれば学期の区切りや休暇であり、社会に出ている人であれば、新しい仕事に就く、あるいは辞める。人生で言えば結婚や出産、離婚というもある。それから家族を失うということも一つの区切りなのかもしれない。

ルワンダの人にとって、あの出来事は忘れることのできない記憶で、それはルワンダの歴史の中で消すことのできない事実であったはずだ。20年経っても、人々はいなくなってしまった愛する人の喪失感に苦しみ、また罪を犯したことに苦しむ。そんな苦しみから解放されたいと思うのは、誰しも同じだ。だから今年はルワンダの人たちが、起こってしまった出来事に一つの区切りをつけようとした年である。

ルワンダの今年のスローガンは、“Kwibuka 20 – Remember, Unite, Renew”、つまり「20周年—忘れるな、力を合わせて、新生ルワンダを目指そう」ということである。

ルワンダでは1月から、聖火リレーが全国を回っていた。この灯は亡くなった人たちの魂である。キガリの虐殺記念館に灯された灯りは、ちょうど3か月をかけて全国を回り、虐殺の始まった4月7日には再びキガリに戻ってきた。

私たちが住んでいる地域にその灯がやってきた時、式典に参加した。日差しは強く、少し汗ばむくらいの陽気。集まった人たちは、その日差しを避けるように、みなカラフルな傘をさしている。それだけ見ると、何かこれから楽しいことが始まるかのような雰囲気だ。

子供たちが振りをつけながら、虐殺のことを歌う。しかしその振付けはどこか皆バラバラで、日本だったら完璧なまでに練習をさせているだろうなあなどと思いながら、それを見る。

そして虐殺を体験した人の話。自分の家族が殺された様子を、記憶をたどりながら話している。そして途中で感極まって涙を流す。なぜ伝えるのか？なぜ人の前で涙を見せてまでも、それを伝えようとするのか？彼らの記憶は20



年経った今でも、決して消えることはない。むしろもっと強く、もっと激しくなっていくのかもしれない。

別の男性の体験談。ルワンダ語で話しているの、私は全てを理解することができない。でも聞いている人を見ると、皆それぞれ重たい表情をして聞いている。しかし不思議なのは、その男性が時々微笑みを浮かべながら話し、またそれを聞いている人からも笑い声が漏れる。20年という年月は、あの凄まじかった出来事さえも、「赦し」ということを含めながら、少しの冗談を交え、話すことができるようになる時間なのである。



ばらばらの振り付けで虐殺のことを歌う子供たち。みんな94年の出来事を知らない世代だ。

4月7日はルワンダの大虐殺が始まった日である。大統領の乗った飛行機が撃墜され、ルワンダとブルンジの大統領が死亡、その後すぐに主要道路が封鎖され、大虐殺が始まった。20年後のこの日、国立競技場で盛大な追悼式が開催された。私たちは残念ながらその場所に行かなかったが、世界各国から要人が訪れた。だからその前後は町中に警備の人たちがあふれ、車で入れない場所も多かった。

私たちはその日、ラジオで式典の様子を聞いていた。会場に来た人であろう、女性が大きな声で泣き叫んでいる。「その時」を思い出し、フラッシュバックしてしまう女性を介抱する赤十字の人たち。毎年、見かけられる光景だ。

私たちが住んでいるところは、幹線道路に近く、昼間はかなり交通量が多い。が、この日は皆、競技場へ、あるいは家で追悼式の様子を聞いている人が多いのか、歩いている人も、車もほとんどなく静まり返っている。こんなに静かなのは、かつてなかったように思う。

ラジオからは各国から集まった要人の紹介、そしてそれぞれのスピーチが聞こえてくる。ここでも生存者の証言があった。これらの証言を聞いていて、感じたのは、彼らの中であの出来事を風化させたくない、なかったことにしたくないという強い気持ちだ。時として人は辛い出来事を忘れようとする。それはそれを体験した人にとっては必要な行為なのかもしれない。でも辛く悲しい出来事であればあるほど、それを繰り返さないために後世に伝えていかなくてはならないという、彼らの強い思いがあるのかもしれない。改めてルワンダ人の意志の強さを見たような気がする。

素晴らしかったのは、ルワンダ語と英語を混ぜながら語られたカガメ大統領のスピーチだ。二つの言葉を交えながら話したのは、つまりこの事実はルワンダ人だけでなく、世界中の人々も知らなくてはならないという彼の思いからである。以下、少し抜粋すると、

「私たちは、今、失われた命、そして生き残った人々」  
のためにここにいる。私たちは皆、心に傷を持ちながら生

きている。そしてできる限りの裁きと和解を追求してきた。この20年、国民は人の前で証言し、また他者の証言を聞いてきた。そして責任を果たし、赦してきた。あなたたちの犠牲は、次の世代への贈り物である。もう二度と起こさない(Never again - 虐殺後のルワンダのスローガンとなっている)という言葉の奥底には、それがどんなに不快なものであったとしても、語られなくてはならない事実がある。私たちは虐殺が起こったことによって、3つの選択をした。一つ目は「共に生きる」ということ。二つ目は自分自身に責任を持つこと。三つ目は大きく考えること。私たちは過ちを犯すこともあるが、そこから学び前進する。私たちの未来には、過去よりも困難な課題が待ち構えている。しかしルワンダ人はそれに対しての準備ができています。20年前のルワンダには、未来はなく、過去のみがあった。今、人口の半分は20歳以下となり、ルワンダは新しく生まれ変わっている。私たちは過去の出来事を記憶するために、そして互いに力を与えるためにここに集まった。私たちは自分たちに約束した未来をもまた、記憶していかなくてははいけないのである。」

このスピーチを会場ではなく、ラジオで聞いたというのは良かったと思う。もちろんその時間をルワンダの人たちと一緒に会場で分かち合うというのも一つの選択だったが、ラジオで大統領の話す一言一言をじっくり聞くことができ、改めて大虐殺後の20年を共に歩むことができたと感じた。



それぞれの自治区の人たちが横断幕を持ちながら、虐殺で亡くなった人を偲ぶための行進を行った。この人たち、殺した側も殺された側も混ざっていて、彼らの心中は如何に？

この大統領のスピーチからもわかるように、ルワンダの人たちの思いは「争いはあったが、過去から学び、共存する」ということだと思う。スピーチの中で何度も「我々ルワンダ人は」という表現があった。過去、西洋によってもたらされた「フツ・ツチ・トワ」という民族の壁をなくし、ルワンダという国に住むルワンダ人として生きていこうという、彼らの強い思いがわかる。

大虐殺が終わって間もない頃、ガテラは日本の新聞社からインタビューを受けた。その時に「あなたは何族ですか？」という質問があった。その時に彼が答えた一言を、私は忘れることができない。「私はルワンダ人です」胸を張ってそう言うガテラに、神々しいものを感じた。

これからのルワンダ、一人一人がその思いを持って生きていけば、きっと素晴らしい国になる。20年という一つの区切りを迎えて、またルワンダに対して尊敬の念を抱くことができた。

そしてこれからも一緒にがんばりたいと思った。

## 【日本でお買い物】

ルワンダで生活をするようになって長い時間が過ぎているが、それでもやはり私は日本人。どうしてもルワンダと日本を比較しながら生きてしまう。

生活の便利さで言えば、軍配は日本にあがってしまうけれど、生きていて楽に感じるのはルワンダの方だ。

何よりも楽だなあと感じるのは、物の選択肢が少ないということである。それはお店に行くといつも感じる。

スーパーマーケットの品ぞろえ、非常に少ないです。だから選ぶのが簡単。迷う必要もないのですね。それしかないのだから。

例えば日本で物を買おうと思うと、あるわあるわ。目の前にはありとあらゆる種類のもの・物・物…。食材に限らず、文房具から家電、ペットショップの缶詰…、挙げていけばきりが無い。

ルワンダでノートを買う場合、手に入るのはいかばかりの硬い立派なノートか、わり半紙（…という言葉は今の子供たちは知っているのか？）のようなノート。このノートはちょっと手荒に扱えば、すぐ千切れちゃう。学校の子供たちが使うのは、もっぱらこのわり半紙ノートだ。

しかし日本は…。ただのノートを買うだけなのに、種類がありすぎて、果たしてどれを買って良いものやら。かわい絵のついたノート、昔ながらの大学ノート、ムツゴロウさんの学習ノート、これには漢字の練習をしやすいようにマス目まで付いている。そしてその横には、太さの違うボールペンだの、うん？抗菌ボールペンなんてのも並んでいる。それを見て、ふうとため息をつき、別の売り場に行ってみる。ほう、デジカメか、そろそろ新しいのに買い換

えようかな？Sony？Canon？なにになに、画素数がどうしたって？これは小さくて持ち運びしやすいな。そんなことを一通りつぶやきながら、今度は洋服などを見ている。Tシャツがぐたぐたきてきたから、ルワンダに5～6枚持って帰るか。これはガテラに似合いそうだな。だけど肌触りがイマイチだぞ。そういえば靴下も穴が開いていたけ。

あちこちぐるぐる回ったから、お腹が空いたな。レストランで食べるのはもったいないから、適当に食糧でも買って帰るか。今日はアジの干物が安売りが。どうせだったらルワンダで食べられないものを、日本でたっぷり食べてからルワンダに帰ろう。しかしこっこの餃子も捨てがたいな。だけどこういう焼きそばパンも魅力なんだよね。

そして家に到着。スーパーの袋の中身をそれぞれと出す。ん？当然と言えば当然なのだが、入っているのは食材。ん？私は今日、何をしに行ったのだ？しばし考える。最近物忘れがひどいので、自分が何をしたかったのも忘れてる。

おお！そうであった！今日はノートを買に行ったのだ。しかし、しかし！あまりに大量のノートを見せつけられ、結局その場で選ぶことができず、歩きながらどのノートを買うか考えようと思って、他の売り場に行って、すっかりそのことを忘れてしまったのだ。

目の前にはアジの干物と餃子、そして焼きそばパンという面妖な組み合わせの夕食。とりあえずどれも自分の好きな食べ物なので、それ自体は許すが、しかし本日の目的、ノートを買うというミッションは果たせなかった。

だから日本での買い物は大変なのだ。それを毎日やっている日本の皆さんはすごいぞ！尊敬！



## ルワンダ事務所代表ガテラより

### 【まだ見ぬ国、ルワンダへようこそ】

20年前の大虐殺の時、私はケニアのナイロビにいた。87年から祖国ルワンダを離れ、難民としてそこで暮らしていたのだ。その頃、同じように国を離れ、ケニアで生活していたルワンダ人たちがたくさんいた。町から少し離れた所に長屋があって、ルワンダ人やエチオピア人が多く入居していた。

90年に入った頃から、ルワンダの状況は悪くなり始め、毎日のように悲しいニュースが入ってきた。しかし国外で生活を強いられてきたルワンダ人は、みな国に戻りたいと願っていた。私の友人の多くも、国を取り戻すために（当時の）反政府軍ルワンダ愛国戦線に入隊し、前線で戦っていた。

私も足が悪くなければ戦闘に加わっていたかもしれない。それができなかった私は友人とホテルの広間を借り、愛国戦線に協力するための資金集めを行った。

友人が私の杖を取り上げて一声。「さあガテラの杖を奪ったぞ。彼はこれがなくては歩くことができない。彼に杖を返してほしければ、私からこの杖を買い取ってください。さあ

いくらなら買う？」「200ドル！」「600ドル！」「いや、1500ドル！」そんな資金集めは、あちこちの国に逃げているルワンダ人によって行われていたようだ。その資金を手には、愛国戦線は勝ち進み、94年7月ルワンダの大虐殺は幕を閉じた。

国を取り戻すために戦ったわれら同胞の中には、命を失ってしまった者、手足を戦闘で負傷した者などもいた。今、私たちはそれら負傷した人たちのため、そして紛争で傷ついた市民などのために義足を作っている。

私の親しい友人も、前線で戦っているときに命を落とされた。その男性は戦闘に加わる前、日本の女性と恋をし、3人の子供を産んだ。その子供たちを残し、黄泉の国へ行ってしまった彼はどんなに心残りだっただろう。しかし彼の残した子供たちは、すっかり大人になり、仕事を持ち、結婚をし、子供も生まれたようである。

虐殺が終わってからの20年、辛いこともあったけれど、確実に命は育っている。いずれ彼らも父親の生まれて育った国を見に、ルワンダに来てほしい。彼の家族も、彼の血を分けた子供たちに会えるのを、とても楽しみに待っている。そして平和について、一緒に語り合おうではありませんか。

## 【ルワンダでお買い物】

ではルワンダでのお買い物はどうかというと、こんな感じだ。

90年代、まだ私たちが町の中に住んでいた時、すぐ近くに市場があった。ここは主に地元の人が利用する、いわゆる青空市場のようなところだ。食材はもちろん、簡単な日用品もここで手に入る。

鶏は生きたまま売られているし、棚の上には「今、屠殺しました」と言わんばかりの、牛肉がぶった切られた状態で並べられている。その横には湖で獲れた魚。あるいはナマズのような魚を乾燥させたものだろうか。怪しげに黒光りして、蚊取り線香のようにぐるりと丸められている。しかしそれらに群がるハエ。デリケートな人は3歩くらい引いてしまう光景だ。

野菜はどれも新鮮だ。こちらも「今、畑から持ってきたよ～」というものばかり。本来の野菜の味がしっかりして、肉食の私でもおいしく食べられる。マンゴーやパパイヤ、パッションフルーツなど、日本で買えば大変お高い果物も、ここではバケツに入れてまとめ売り、しかも安すぎる。



こんなふうに調理用バナナも売られている。子供たちもお手伝い。

世界中の市場がそうであろうように、ルワンダの市場もごちゃごちゃしている。売り子のおばちゃんは見事な体格で、買い物客とおしゃべりしている。そしてその回りをちよろちよろしている、下半身丸出しのままの幼い子。

ここで気をつけなくてはいけないのは、買い物客を狙った悪がきどもである。普段は客の荷物を運んだりして、お小遣いを稼ぐ、あるいは完璧な生業として稼いでいる10代から20代前半の男性だ。

この悪がきどもは、言い方は悪いが、客が市場に来ると全くうるさいハエのごとく近づいてくる。みんなお金を得るために必死なのである。なるべく自分で持とうとするものの、か弱い私はどうしても持ち切れず彼らに頼ることになる。

もちろん良い子もいる。しかし、中には盗みを目的で近づいてくる奴らも少なからずいるのである。のんきにお買い物かごなど下げ、ショッピングを楽しんでいる余裕はない。常に彼らに物を取られないように目を光らせ、財布はしっかりと握りしめておかないと、とんでもない目に合う。

私も何度か彼らにやられた。紅茶に入れるミルク（いわゆる粉の、クリープのようなものですね）は決して安いものではなく、大事に大事にけちけちと使う（しかしルワンダの人は、大量に入れるが…）。その日、キロ売りをしている袋入りミルク（缶入りのよりも安い）を買って、自分のかごに入れた。「今日は久しぶりにたっぷりミルクを入れて、

贅沢しよう」などと喜びに震えながら家に戻ると…。

あれ～、買ったはずのミルクがない！おかしい、おかしい、どこに行ったのだ～？

そう、彼らに盗まれてしまったのである…。あまりの悔しさに涙が出てきた。大げさでなく、本当に涙が出てきたのだ…。そして未だにその騒動のことをガテラに言われる始末である。あれから15年以上も経つというのに。



買った品物は、こうやって頭の上に乗せて帰る。どうやらこの方法が一番楽しい。

市場での買い物は、それだけではない。また別のハードルがあるのだ。

それは「値切る」ということ。こうした市場では値段交渉が常である。しかし私たちの最大の弱点は、肌の色が違うということなのだ。相変わらず「肌の白い人＝お金を持っている」という公式が出来上がっている。どんなに小汚い格好をしても、色が白いということだけでめちゃくちゃな値段を言ってくるのである。一生懸命ルワンダ語を話して、おばちゃんたちに取り入ろうとしても、彼女たちの攻撃は緩まない。一生懸命、一生懸命値切っても、後でルワンダの人に聞くと、やはりぼったくられている…。

だからねえ、市場で買物をするとすご～く疲れるのですよ。決して細めの体型ではない私でも、現地のおばちゃん体格と勢いには勝てない…。彼女たちにとっては、私はいつまでたっても、金持ちの国から来た日本人なのである。悔しいが仕方ない。が、冗談ではなく、ペンキで顔を黒く塗ってやろうかと思っただけである。

それでも昔はそのやり取りを楽しむことができた。少しでも値切れると、勝った気持になった。

しかし月日は過ぎ、私の気力も体力も衰え、未来永劫元氣なおばちゃんたちに太刀打ちできなくなった。

自然と足は市場から遠ざかり、楽に買い物のできるスーパーマーケットへと移っていった。ここなら定価というものがあり、怒鳴り声をあげずに買い物ができる。買い物とはこんなに楽なものだったのか？穏やかに買い物ができる喜び。少々値は張るが、心の平安を買うと思えば安いものだ。

バブル全盛期の頃、仕事帰りにいつものようにお気に入りの洋服屋に行って、服を買いまくっていた。丸井のバーゲンなどは、少しでも良いものを安く買おうと、朝から並んで挑んだ。しかしその元氣は今はない。

私は日本でも何を買って良いかわからず、買い物に苦手になり、ルワンダでも逃げるように市場から遠ざかり、楽な方へと流れていく。さながら買い物難民のようだ。

果たしてこの先、私が買物を好きになることが再びあるのだろうか？



# 今号の患者さん



# 紹介します！ワンラブのスタッフ

以前ワンラブ通信で紹介した、94年の大虐殺の時に手を切られた女性、クリスティーン。その後京都の会社にお願いをし素晴らしい義手を作ってもらった（私たちに彼女の求めている手を作る技術がなかったの…）。

義手を作るとき、あえて彼女の生い立ちについては聞かなかったが、日本で彼女の話をすると、H新聞社が記事にしたいという。その時初めて彼女のとても怖かったし辛かったであろう体験を聞き、義手を装着し、少しでも良い人生になればいいなあと思っていた。

その頃、彼女は仕事を探していた。でも障害があるので、雇ってもらえるのは難しかった。だから自分でビジネスを始めたいなあと言っていた。

ワンラブのレストランは今日も盛況。ありがたいことにお客さんが増えてきている。食事もたくさん出るようになってきた。

そこで問題になったのが食材管理。食材のある倉庫を開けっ放しにしてしまうと、従業員が勝手に入って、勝手に食材を取出し、勝手に料理して食べてしまう（！）。そんなことをされたら、いくら安く手に入れたとしても、利益につながっていかないではないか。



義手を渡した時、その手をはめていそいとガテラに見せに行ってくれた。

というわけで、在庫管理をする人材が必要となった。浮かんだのはクリスティーン。

この仕事ならば、手が不自由でもそれほど無理はないはず。電話をすると、すぐにOKの返事。毎日の食材の出入りをチェックする。どうやら都合よく、彼女はそういう勉強をしたようだ。

で、彼女、ワンラブで働き始めました。

最初は前の人のやってきたことをそのまま真似するだけだったけど、今は自分で在庫表を作ってチェックをしている。時々抜けたり、忘れたりすることがあるので、その時はゴツンと言。

しかし一緒に働くようになって知ったのだが、実はもう子供がいるとか！だからその子供の送り迎えを済ませ、それから仕事に来る。そしてもうじき結婚するのである。順番が逆になってしまったが、そんなことはどうでも良い。ワンラブブランドにあるホールを利用して結婚式をあげるのだ。普通はこのホール、貸出料をいただくのだが、めでたい彼女の門出、タダでお使いくださいませ。せめてものワンラブからの協力です。

どんなウェディングドレス着るのかな？楽しみ。

ありがたいことですね。8月にまたルワンダの義肢装具士見習いが日本へ行きます。ワンラブ通信にいつもそんなことを書いているような気がするが、事実なのです。

これで8人目！すごいな～。うれしいな～。

彼の名前はクリストフ。クリっとした目がかわいらしい男性である。体も細く、女性的。今まではガテラを真似して、頭をドレッドヘアにしていたが、何を思ったか突然バツサリ。失恋でもしたのだろうか？



僕、クリストフです。シャツの襟を一番上まで止めているのがかわいらしい。

彼は最初、ワンラブのレストランでウェイターとして働いていた。多少の英語も話せ、その物腰の柔らかさから、女性にもウケがよく、結構きびきびと動き回っていた。

今どきの若いものなので、仕事が終わるとクラブに遊びに行ったり、お洒落にも非常に気を使っている。

しかし彼は単なる今どきの若者ではなかった。ウェイターの仕事はそれでそれで良いのだが、もっと発展的なことをしたいとガテラに相談したようだ。

そうなる人面をあれこれ見るのが大好きなガテラ、俄然張り切り「じゃあ、義肢製作所で勉強してみれば？昼間は義足作り、夜はウェイター、バイト代プラス昼間の分は少ないけど生活費を支給するよ」

というわけで、昼夜両方ワンラブに係るようになりました。ただ、レストランの仕事はお客さんがなかなか帰らないと、明け方近くまでやっていることもある。義肢製作所は8時からスタートである。ほとんど寝る時間がない。ぐったり疲れている姿を見て「今日は少し休めば…」などと優しい言葉をかける私ではない。バイトはバイト、勉強は勉強である。両方やると決めたからには、できる限りまでやってほしい。多分私のことを鬼と思ったかもしれないが、若いということだけでカバーできる体力を持っているはずだ。

そんなわけで8月から皆さま、よろしくお願ひします。私が思うに、彼は日本でモテちゃうかもしれないなあ。それは喜ばしいことだけど、あんまりモテちゃうと嫌だなあ。親ほど年が離れているのに、そんなふう思うのはまずいのだろうか？いや、決してクリストフをどうこうしようってわけじゃないのですよ。ただ親心のような心配がわいてくるのでありますよ。

まあとにかく行ってらっしゃい。7か月間、無事に過ぎてね。そして日本語もマスターして、そうだ！今度研修に行った8人で日本語弁論大会でも開こうか？

# 日本事務所より

「日本事務所より」というよりは、最近ここは私の独り言のコーナーになってしまっているがお許しください。

ようやく20年。虐殺が終わってから、とにかく突っ走ってきました。ルワンダの国も、ワンラブも。

あの頃、確かにやることはたくさんあり、疲れを感じる暇もなく時間が過ぎていきました。今の生活よりもずっと不便。停電・断水は日常茶飯事、料理をするためのガスコンロもなく、灯油の調理器でとろとろとシチューを作ったりしました。

若さというものはやはり素晴らしいもので、そんな不便な生活も、大して苦痛ではありませんでした。むしろその不便さを楽しんでいたように思います。

しかし今あの頃と同じ生活をしたいか？と聞かれたら、答えはノーです。ガスで調理をする便利さを知ってしまうと、後には戻れません。

ワンラブブランドも虐殺後の20年間、少しずつ少しずつ手が増えられ、今は緑の多い素敵な場所となっています。

この場所を政府からもらった時は、草ぼうぼうで途方にくれました。どこから手を付けて良いかわからず、とりあえず…とレンガを作り始めました。

ガテラは毎朝5時ごろに家を出て、建築作業。私は義肢製作所に行って、製作や事務仕事。

大変だったけど、今思うと楽しかったなあ。しかしこれもまた、最初から土地を開拓して建物を建てよと言われたら、「勘弁してください…」と力なく答えるであろう。

そう、20年の間に私の体力は確実に落ち（ガテラの体力も）、あの頃を懐かしむことはあっても、もう繰り返したくないという思いである。

もちろんまだ引退はしませんが、最初「攻め」の姿勢だったワンラブは、今「守り」に入っています。それが年を重ねるといことなのかもしれません。しかしまだ年寄ではないのに、そんなことを書いてしまうと、私よりお年を召した方に怒鳴られそうなので、これからとにかく前に進んでいきます。100メートル8秒台とはいかないまでも、マラソンを完走するつもりでやっていきますので、皆さまどうぞ応援よろしく！

## 【ご寄付ありがとうございました】

ワンラブ通信51号をお送りしてから今までのご寄付は以下のとおりでした（1月～6月）

1月	円
2月	円
3月	円
4月	円
5月	円
6月	円

このおかげで、ルワンダとブルンジ合わせて、次の製品を配布することができました。

義足	24本
装具	9本
杖	84本
車いす	3人

皆さまの温かいご支援に、改めて感謝申し上げます。

## 【書き損じはがき・テレカありませんか？】

書き損じはがき、テレホンカード、商品券などありませんか？

お正月にたくさん買ってしまった年賀状や書き損じはがきなど、ワンラブ通信を発送する際の切手などに換えて利用したいと思っておりますので、ぜひお譲りください。

## 【ルワンダを訪れる人へのお願い】

ルワンダの治安が落ち着いているせいか、日本でルワンダのことが語られるようになったせいか、この頃ルワンダを訪れる日本人が増えてきました。また日本人だけでなく、様々な国から旅行客が訪れるようになってきました。つい昨日もワンラブのゲストハウスとしては初めてのメキシコのお客さんも泊まってくださいました。

旅行客が増えるとともに、ルワンダは物も増え、以前より便利になりましたが、それでも手に入りづらい物もたくさんあります。

私たちも活動を続けながら「こんなものがあつたら便利なのになあ…」とか「あれがあるとうれしいぞ」というものがあります。

そこでルワンダを訪れる人へお願いなのですが、飛行機に乗ってしまう前に一度、私たちにご連絡いただけないでしょうか？そしてそれら「あつたらいいなあ」という品物を持ってきていただけないでしょうか？

もちろん怪しい物を要求したりしません。例えばプリンターのカートリッジであったり、日本ならではの便利グッズであったり、はたまたこれは全く個人的にほしいと思っている食材や身の回りの品々であります。

一年に一度しか日本に戻らないため、そういう品物を自分たちで持ってくるチャンスがあまりありません故、皆さまのお荷物の許す範囲で、お手伝いをしていただけましたら幸いです。

ちなみに個人的にほしいのは、キューピーマヨネーズ・カレールー・乾燥わかめ…、あげていたらきりがないので、この辺で。

## 【お願い】

ワンラブ日本事務所は、皆様のご意見等を積極的に取り入れたいと思っています。ルワンダ・ブルンジについて知りたいこと、ワンラブに対するご意見等、どしどしお寄せ下さい。

通信発行のお手伝い、イベントのお手伝いなど、相変わらずボランティアも募集しております。またルワンダ・ブルンジで中長期のお手伝いをお願いできる方、ぜひご連絡ください。

## 【おことわり】

\* 発送作業の都合上、振込用紙を同封させて頂いておりますが、

すべての方に寄付金・会費を催促するものではありません。

\* 当団体はご提供いただいた個人情報について、皆さまからご同意を頂いた場合や、正当な理由がある場合を除き、第三者に公開、提供することはございません。

書き損じハガキ、テレホンカードは下記、茅ヶ崎事務所までお送りください。

ご寄付は下記の口座まで、みなさまのご支援お待ちしております。

※事務の簡素化と経費節約のため、領収書は省略させて頂いております。

必要な場合は、振込用紙の通信欄に「要領収書」とご記入ください。

〒253-0051 茅ヶ崎市若松町12-28-304 Tel: 0467-86-2072/080-6564-4448

e-mail: info@onelove-project.info (日本事務所) onelove@rwanda1.com (ルワンダ事務所)

郵便振替口座: 00210-5-66497

ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクト

ワンラブ通信52号 2014年7月

発行: ムリンディ/ジャパン・ワンラブ・プロジェクト

<http://www.onelove-project.info/>

<http://oneloverwanda.blog105.fc2.com/>

<http://www.onelove-project.org/>

